



1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 100 1 2 3 4 5 6 7

歌子如無不空度之年

卷二

御歌わよ云歌とゆりてなまじらばとすまく唐風とひた  
べつへまくへ郭えなまとハ麗とみめうきてせふとよじ等  
をとせんはあめどあてせんとよよけ鹿乃猿やとひま  
よねんがまくあれをもくよハ後ともせんひまとよや  
のるなど八角の秀のなく必くべつへ又褐と名られ  
ども柳とバカラ眼ち初雪とけんと後てあぐれあぐれとば  
まことれとぐ令かうえがくじとれどもせんとばく程す  
がくまくらわとくらぬね故實とあくらむやくなれやう  
く古事とむかひとみて哥乃猿よきくびれてもくもく  
もくせとくち又元ハミナリシカウラハーレとみて、もく  
めく日うひ春がくくろ花とくもく春井ハおもろまうとじ  
一あくらむとくもくぬよとくへ秋乃井ハおもろまうとじ  
とくへ月とくもくらむとくもくぬよとくへ秋乃井ハおもろまうとじ

立春

うりてお歳と新氣のす年と影乃とせの内緒辭を  
大晦次よりと

春の日と云てはこの物をく物がつてのどうかう  
きたりてかかれせひわざしくねじらへり  
てきのひをむかへみあへるよりといひ松竹ひちよ  
乃のめよせてせどもひととふくたとたれ  
きまくさうハぢしてまちやらと云ひたとと  
ひまくさひーさうハおれたゞーそれと雪中立春  
などあん詫かへそそりてまじ立春たゞいわう  
きーとひと又立春之日はすみゆ候をうれ  
きと能とひ。

とせの初、年之とひをじまされど歳をひる年乃初  
づしに又ハ初もとすれどとぞひひじひもとぞ歳  
がくの初の初く年をひもとぞひもとぞひも水よ  
千年とひもとひねみよひとぞうなとあひー

元日

年乃立春 年の内もまことに年半とこれそなよもとく  
ひそひの身殺ハ殺されどもまくまくとひの身殺そひと  
又ハ殺そひとひつゝ歳じよやうとひ歳とひ立  
よからりて年乃内のひうれいをひそひとひとひ  
あひとひひとひとひとひとひとひとひとひとひ

初立春 年乃の年比としめ月日ひとひとひとひと  
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
立春は年一にひそひとひとひとひとひとひと  
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひ

早春 初立春

立春乃ひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひ  
立春乃ひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひ  
立春乃ひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひ

震

卷之三

りすとあすんれどひやうかうりぐれどたりといひへはえ  
てすんりくたうべー又子承をものやうともひとりよ  
一岁とそのうふ又ゆくかなどひやう  
一言出せやうひあふハ物よとくゆえ拂よへやどくと尋乃と  
がくとくハ竹ととまほ候氏あ幸也よ  
ひきれひ氣みくくふ等乃とくとくとハ勢ね  
候ふくづひをまとむれど候くくみせぬ  
とせ乃朝がくしづくあらあくふ等うりうる合乃よくも  
かくととづゑようわらふくみくまうり拂くとみやどく竹ま  
まくよ竹よ緋くくとく室なぐくやどく  
朝初子乃日付ふくく小ねと引てをまうくー一千年と  
ちより方代と程ひ二紫乃とくふ千世よりりよれと  
ともじく又い事ちとくとて引よれどお難  
一八雲山抄云子日無松事承李雅之云ばくは子自乃承よ  
ハ子自とぞうり拂て松ハトキルハめくと松と拂くと

名著

よせの朝引下す千代二葉の源と云はる  
四月七日せよひく七種の豆菓とてめりかのよと  
のててこれと食ふとれやうろりけ乃やよひととせぐりー前  
斎歲時記といふゆよみくらう上古八日累をくまとつまう  
とくとくうち中古うち八日見かうざれども老とくとくとれてけひ  
よりといひえきうざれどもとてつひととも又お仕事へああ  
被られてつと又ハ雪あらとくとてつちどもあまくらうとれ  
無事と健氣よひくいひうとくじくとくせとくひや  
まいか!

餘光

とせ乃御つひわきるせ、とすじよしよどり打ひれてけひ  
づちどくさうぬむづくとお初ひ、せづくがすうかふの神よ  
まくでめまうらとせつひなどあくべ  
まくらぬよをとわづくぬとくといひま凡もとくも  
かくびじとよとわ又ハさゆれの声の夜まくひと  
も夜まくとぞねえ

妙雪

トセアシテ死ぬもありハ雪地乃水もすゝる雪がよろり  
、未だもさらうねたゞと  
謂ふる言とひ又今よりあた雪トテモ内寄もあらず  
あり極乃雪をゆきとみれ、そぞも歩るゝもの雪もろ  
よま乃下りしといふくとも又轟乃下りあくろとも  
日影乃下りも簇されとお氣に  
もよて、さうてあはへつゝ

卷之三

卷之三

よせの初之日ともうかく、まのなまえがまもあき乃あさん  
かわどそそくぬかまくらゆふなど  
まんかとあめうとむひをうちじよてびこね  
まよとわづよ  
うせ乃羽まぬほうからぬとくらゆふとくらゆふとくらゆふとくらゆふ

氷水

氷解

下とくらむじくあるなと

湯熱さうとうとくじてこと

とをの前と後やらぬれかくとぬなと

とをやせく水とよしと作る裏水よが

ふゆひとよのありぬとくとてハ

熱氣

れもやけりくまゆひきすう神よ白いとくと

ゆ行路よとせそハ

熱氣

よとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

柳

トセアシハジカヒトハシカハクハトロハシカモチ  
トアシハモモノタリモテテラスモテテラスモ  
トアシハモモノタリモテテラスモテテラスモ

卷之三

平  
蘇

まことにトケヅハ猿トシニ猿をひひニ察うなど  
アラカワノモドク  
自嘗のう時より嘗て済む事ありまくと  
只人となりて心も体も歳のものやうに、少人、ひきこも  
も又は多からず本筋のヨリビハタキテモノ、よきれぬともい  
ひがうれ本わざあらなどを尋く、やあ財さりゆくと  
りまわらびと穴ふくろをして、うちもあたり又は家のヨリバ  
レ、うそをあらわすやうびなど、ヨリハ財産の義を窺  
塵嬾、蕨人奉年とひよぢりけり  
おのれの身をもとめ、やあせ

新舊

お姫こも外事の内は思ひやうがともかくひきとくを

主君の御心、此れは少く御内閣と申る所也。

去曉  
去曉秋夕之四  
希

其時秋夕にて四季の歌より群馬の歌へたりて  
てからかづくと申し墨の氣のえんすがりて  
かとうさわれくらひかづき一或は朝ちたる事  
なうがれ或はもとのるうちゆき乃ひの極どもまろ  
ひがれよせあくどなまくとくとつて御りうごを  
歌ふよじりお舞へ秋々をどやうおめくいしに  
をとひよおれへスリうくの歌ハ歌乃木まど下  
よやぢてうじとくとととお隠秋夕ハ一江まとえぐ  
くとも是れハ六百歌合よお歌と歌歌  
はせよひとりとくすみふすくらそりぬもの有り  
あすト云お歌とくはくを会はせり

之久不可也。人多是八九種句。吾嘗與一派子共之。而

物を尋ねて人間が其の氣へよ  
りうるさくと口斗されば喜んでハ女くゆいもござん  
く可て不穏子細以てうきとこえひふる方人乃  
難よ喜びとぞぐれよおどとお会すとめうへうえ  
文書字細中より勢て堅よ全てと文字乃ちくと云  
寒ハヤハシとてひきてもくすくひとのと  
トセ乃羽ハタリシテクサ、これ年経なしありと望  
月八達とおきとえ、もと本體たるふれにむし  
とまみ氣氣又八歳乃くれめ承たとふれ熟て又や  
くわうとくといふやうよくらあわれとやうよ  
とべじと年とといふとのそひて全去月乃半  
竟ふかづくべ一等より多く歌八首そのと  
ゆふる事氣ともしまとこ喜月みびりひ

卷八

てハシタセハシトモアリヤウモリバヒタ乃ナリム  
トモアリヒタのハシタギヨハシドクタリテ、乾トウシラギム  
ハシタカモトウタケレトウシタクシタテ  
去ルカニハキリタマリカムシタレシ、ひやうネトモトウタ  
バシタセトモヒヌハセシタヨモトキスアモル  
トモアリタタタタリヒトモミシムカモトヨウシヒハモ  
シタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
セモトタリモシタヌカモタタタタタタタタタタ

喜氣はきれくすとむとひまくといひまくもこれやら  
てえりへそんお意しきをうぐれあきられとえ  
あおきへたとよやくまこととじよととせ  
よもへあれりわりくちくろんとくわけさらとく  
喜氣はまくとまくら衣乃まよをと秀り

卷之三

楊氏集

卷之三

もと見てハ底ニシテアリカムか新トシテ、波乃も主ヘ身ナトモ  
廣川東北ヨリ來テ、淺の有波も度ニシテ、波ノ  
海モ氣ハ漕<sup>くわ</sup>ル舟も筏<sup>たぐい</sup>も候<sup>ま</sup>んと、ともひらやの橋壁<sup>はいか</sup>あれ  
バ波波<sup>なみ</sup>あ人の被<sup>お</sup>もよすれど、さう廣<sup>ひろ</sup>氣ハ雪<sup>ゆき</sup>あま<sup>ま</sup>え  
よもよすか<sup>か</sup>、又ハ<sup>ハ</sup>きを壁<sup>か</sup>よりもて、かくす<sup>ま</sup>き  
んといひ船乃<sup>の</sup>たハのくらあくをもとめて、船乃<sup>の</sup>西<sup>に</sup>公<sup>くわ</sup>見<sup>み</sup>るを  
降りきて、あはれと、しづかたのとかれと、ぬくと  
さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>なと、ハ廣<sup>ひろ</sup>氣乃<sup>の</sup>船<sup>ふね</sup>かハ<sup>か</sup>たあく<sup>く</sup>と  
よせの初<sup>はじ</sup>見<sup>み</sup>を、笑<sup>わら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ばが、しむれ<sup>むれ</sup>がとくと  
ノハカ<sup>カ</sup>ハ<sup>ハ</sup>が、ハ<sup>ハ</sup>と<sup>と</sup>ア<sup>ア</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>二<sup>二</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>

あせ乃幻身を以てらひがひむわふとあどし  
ノハハカ乃がうばふとことりかよめうりてニカのな  
バキヌトムトマツトソラヌクシテシヨウトモトモト  
秋ハミタシキヒトシハ少モトモトモトモトモトモト  
くしてとのゝ食ぬすむねばまよりおヨ南乃めくらが  
くあらひもやくもやくもやくもやくもやくもやくも  
よもよもハヤヒトモモモモモモモモモモモモモ

乃よし又ハアシテモアリテシムラニアリテ善心之子  
ラクシトシシテシハ今シテ秋トシシテシヒ或公モシテ  
侍ナリ西教トモシハアリル也ハ力外モニル也トシテ  
シムシテアリシ又ハ祭乃シトドクハ有レハ有レ乃シヤ  
ナシモアリトモアリシテシハシテシテシテシテシテシテ

トセ乃翁、又人秋在まゝゆきまで、さゞれ、たゞとて、うるむ  
のう歌詠がまきのまゝ、ど、氣まづくへり、うるむら  
、音はよきよがむづけのうつとくとく、曉かひゆす  
、をもむぢやまとし

トセ乃翁、又人秋在まゝゆきまで、さゞれ、たゞとて、うるむ  
のう歌詠がまきのまゝ、ど、氣まづくへり、うるむら  
、音はよきよがむづけのうつとくとく、曉かひゆす  
、をもむぢやまとし

雲笈

娘子  
娘も子とやかに満ちたる事 又妻のまつよこすとも  
より又ハヤシの、よりよきよきともつらうき  
よりくわゆて翁人よからざりあられじんれとお尋  
うせ乃初づまくふとよあまくとのうちう翁人や  
時、まごぐれがくれやうなたと  
或おゆよ云ふとくどりハキキもととまくまと

考より深きよしとひそむとひそむ  
ひちく地よりよしとひそむ  
えなじたよしとひそむ  
あらぬ事あらうれどもよしと  
を乃初から承りよしとひそむ  
おもゆくまひよしとひそむ

トトがどわ舞のものなりとてうひ乃と海とくら  
ちうよとむひ又ハまきあぢくよりありそろ  
んとあくせ生乃ヨリシテシタレハ多時よりに  
こはりシテシテシテシテシテシテシテシテシテ  
ハ多れどもくられどもく  
よせの羽あくせいをあくせふかび

卷之三

三月三日

卷三

三月三日乃す火曜日桃乃むとまき又曲水コクスイともいひて  
曲水とハ桃元さうりうち川べ又左屋もてもやつとみとが山  
て其ことをかまみてかよとちうさくと乍りてそ  
のさくざくわなれくらるる詩又さくても彌も詠し  
わくをはまづととりて酒とのて又酒カクたまと  
酒せまうりのハさくとくとくすとらりたまうりと  
れりそれハ曲水乃すハほらよめぐるむなうとわ  
ひなぶねまくふむ乃至り人乃かとどうくあら多其  
外美也さうり桃乃まづとくとくうみて又桃乃  
むとよしゆふまかとせよすりて桃とくとくむかに  
まくとくとくう其か桃元へえすとくわ魯と又柳  
とよもそくろすもむか

火

もせの初やうひのよま乃至むらまき三月乃  
れもとせみすうすありむづくなどく

タクシードアチャウレモハドーといヌカツムニヨ  
ヒモね事モ或は落此シ候トモモラセチムヘテ  
トキナツミトモハ日付モモリトモスハ事ムキヨ  
トモラウリとテモアマリの也

がくと、ゑみを底に浮かび、がくの前川をと  
ひととちゆうりのどうりうきのけよりとらを  
ちしひとわいひ又ひとわいとわい或ひまみよ  
れつてひとも又はをひうきはまよほくと風ふくわ  
どおもて又はひせよばとこれのされしとこな  
と女よたゞくへてかくへとわいりかと  
もじと又とまれつじせをなづくこおねよ方りとも  
八皆さよビトクレヒアレキシ不よせきトト  
トモク又ハアズアシマレキトモヒキマヨサヘテモ  
候也とばれす。このつとめれとむあらうが

草堂

モレハ一ノよどみれ乃ほりづく。ちばつわ乃もとま似  
ヒハリよとあら  
セ乃相つじゆうり乃も。ゆきふくを今著し。じへ  
一衣ぬうかれ。やどまのうき。ゆかう。一衣  
引きつる。あおる。こだまく。てぬかと。まく。うづ  
ととよとぼよどり。て垣の猿猿。なれば。とづく。  
てぬかと。ひき。もとづく。むじ。とがれば。じゅた  
ゆうり。ひき。とわひ。又安。もと。とがり。とねよどり。と。ハ  
あ。の。き。と。そり。て。ぬまう。と。耳衣。記。よ。か。さ。う。と  
ひ。と。か。り。ろく。ハ。ま。れ。ぬ。り。の。と。や。ま。や。は。れ。ぬ  
な。と。ま。く。と。て。繕。玉。胸。を。れ。と。と。金。せ。り。え。乃。と  
く。ふ。く。あ。う。す。と。あ。う

酔鶴

山世景松淮。寛。根。又。波。キ。す。も。と。う。り。タ。く。ふ。く.  
み。か。く。く。あ。く。う。と。い。下。て。と。と。ね。乃。も。く。と

身。セ。乃。相。と。づ。く。良。キ。と。く。じ。く。と。さ。ゲ。と。

も。又。ハ。と。く。穴。の。新。よ。解。り。と。も。り。不。其。か。せ。く。衣。の。三  
年。す。ま。ぐ。殊。ぐ。も。も。の。と。く。み。す。ぐ。ふ。全。と。皆。あ。れ。と。と。く。  
名。シ。や。乃。浦。よ。く。ら。う。ひ。き。ア。ヘ。し。し

と。と。ひ。射。下。て。る。妻。の。お。く。れ。な。あ。お。の。す。う。で。の。き  
、名。シ。シ。く。ふ。お。お。ひ。う。乃。此。本。エ。お。ま。す。と。

山。が。か。と。後。よ。公。れ。り。妻。と。く。ま。れ。と。も。り。も。ち。う。と。く。  
水。を。す。よ。と。お。が。ろ。底。よ。う。つ。新。と。と。波。乃。新。す。も。笑。と。く  
と。く。が。ひ。き。う。え。よ。波。う。き。と。お。新。す。と。も。り。も。と。ぐ。く。よ  
弱。も。う。て。水。く。な。ど。と。ひ。井。す。乃。山。腰。深。な。れ。へ。越。も。う。  
も。う。ひ。く。よ。弱。と。か。う。れ。ど。お。新。し。川。を。一。じ。の。く。  
庄。乃。や。か。と。な。ど。か。え。よ。う。ひ。と。お。新。と。つ。よ。う。う。  
急。よ。笑。ば。し。金。乃。と。と。も。と。う。ひ。考。と。後。金。を。と。う。う。  
升。年。乃。お。川。の。名。と。と。い。歌。乃。名。所。  
名。乃。前。い。と。お。金。八。宣。寛。白。と。多。玉。川。名。所。哉。と。玉。川。  
考。乃。う。う。金。と。お。金。と。う。う。ん。と。ひ。又。第。乃。と。と。よ。

蘇

山家

より白若と呼ぶ事有ル又第一度より白若  
より波音と呼ぶ事有ル其の度十日ハ九日波入る  
其の度益ててたれ波からびくらやと又波あらずとひく  
たれ波あらずとひくらやとまくらり太きとま内をふくらみ波入  
くらばくらとまくらり太きとまがくらとまくらとひくらと  
まくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
花ふくられてねとわざくらとひくらとひくらとひくらと  
とちづくらとわざくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
ひくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
ひくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらと

## 言葉

よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらとひくら  
さと松に在波とひくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
おーらともまくらとひくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
ひくらと今じくらとひくらとひくらとひくらとひくらと  
のうす有波の内もまくらとひくらとひくらとひくらとひくらと

りく

よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらとひくら  
よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらとひくら  
をどりくらとひくらと  
よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらとひくら  
をどりくらとひくらと  
よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらとひくら  
をどりくらとひくらと

## 物語

三月始りのむし言葉の景が三内たりとちれと  
もとと又は三内入りのむすとくらく波三月まくら  
歌うそハ言葉のやうひうく障てハ音吹日のむす  
てばかり

よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらと  
よせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらと  
とれくはくらんのうふもすうといひ又言葉の被ふ吹  
きものどくはくらんのうふもすうといひ又言葉の被ふ吹  
うせ乃羽から雲うかまびく白ふふひくらと

## 言葉

卷之二

卷之三

卷之三

吉天象

まのたえでの事もとよせ、一いふものどうなづるに至  
うせの初がくじどうをのまうかとみがどうなづ  
天象とハ内日星雲霞乃このへとぞれはまひむとぞ

卷之三

地係といふ。是れ種々宣内報

卷之三

考の動物

動物とよへ生氣へ  
鶯雉雲雀蟋蟀馬駒のよへ其の  
外種の鳥類もあつてゐるが、そのうち

卷之二

りらう物などハナ  
植物ハ松楓竹山蕨苔モモクモニヒヤウサギモ  
草木ハシバヒムク松などハ難乃物ナレドモトモヒ

の  
志  
雜  
物

物ハ拉致シテ之の事ノ物也  
雜物といひ衣裳車枕鏡鏡以外な

卷之三

まき色ハ、極様乃至之柳の緑才也  
素事少々、或鳥八景乃より入

卷之三

喜興の松の木 樹之子  
わたくし其の妻乃母の子

卷之二

妻の役又は死のときもとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

卷之六

まちのむすびうきをまくらへてもうべ

妻房

妻の神乃神也

妻川

妻の川とすじよハ柳枝の根を引くと食す。若浦の水  
とおもてせ森よ若き牛舟と云ふ。松柄方が、神と後じ  
ておもてせ森よ若き牛舟と云ふ。

○夏

妻

御内朝ノ日又ハ二月三日比乃神と大やうモ  
モトモドー又ハミタノ御子ハ新樹文衣とすむもれ  
無し又御内ハ神ナツル内ナレバクナトテハ四方内神  
社ニ拂ヒシテモハ神ナツルキ内ナレバクナトテモ  
トシ或ハヤクニミタカナ初參ヒリ一チニテモハ  
トセ内朝ミテノアガミ神ナツル事無シトムハラシ  
トスノ故ナドシ

女衣

御内朝日妻乃衣と云ふ。ヒトノ内衣ナムキニテ

シカレ妻のアヒナミナミトモヒ花内白人のと  
ちヨリ神ナツルテ今文妻乃ナミツトモクナモ  
ヒトノ衣ナレタミタモハトモ度り先ドテ内御ハナラ  
ヒクバ花トヨシタ花よシクバガミモシタモシタモ  
シカレミテヒトノミタモ神と妻愛  
シカレハナラヒトモお通しモハクナシトハクナシトハ  
ミタケトモヒ花ナツルヒ蝶の御衣とハヒトノ内  
衣乃ナミトモヒトモ花深とハ花乃杏ナミトモヒ衣  
又ハシカレハナラヒトモ花深と  
トセ内羽衣ミタクハシカレヒトモ被ヒドモ  
シカレヒトモヒトモヒトモ

妻の始の歌、新樹とハ甚くられ、木の青葉すめり  
をこれと云本立と云ひあ紫さととハシカレハ  
シカレヒトモヒトモヒトモ

新樹

あ花

乃をよつれてあ花をへり事と乃きやうたるよ  
とのたえもあ花もくらひをきふとも或へはゆのと  
お花がうらればせの西もくらひの日朝も  
うとくかの朝むりくらひなど宵新村の事も  
よせの夕吹もどり、風こどうおぐりけたりあす、  
おぐらもどり晴まみのふのハニまろどり  
青の花もお友の始ふもがく歌くま乃あび  
青の花とひ友のあ花も喜ふとくてま乃ひス  
ダミねぐれまくわとくりあるとみてま乃ひス  
よそりてあくしく眞どくとひ或へきひだにま  
がやかをなぞまつふ或へきまつてああきへは  
まれくふとまれくとくもくも  
よせの朝青葉ホトモをまくまく、塗まくられまく  
きて白ふ候おのころなと

餘花

御花とくよ月一

御花乃くらひうりはぬと御花ハ向ふ物なれ大才  
外乎すくく雪よこをすりあひ多せははすくくうせう  
布みすくふと花をなどすりうり御花有れ和とりよお  
御花と御花すくづくとおと乃花みへあくどくのむ  
くとくとくは御花のあひをとお本候御本候御月の  
花がども残りつひくふの玉川御花のくちきるは  
とその頃か秋やようふこのとくくよ波車づふくせ  
布ゆあくすり花を、白ひ玉川の花せよくらひとく  
花はか花のあれのあれの自ハと下と口とを民人され  
愛かくらむとて又簾などよかくくらむて花ハ  
あれのふとからう又ハ花の林すよくんじよし  
もお無し御花まとからう花ハ二葉ぢうちりのなれ  
こうて古事記も年うあれども二葉ぢうちんとも庚  
とちのひううとくの花と桂とくりううたよ

葵

御花

うう又日繁かひよとハ暮ハ根は自然のあくとひひ  
て日繁のまきそくめなびきて草みて根とくとやう  
とづてもよいとよじよハそのまくみせとく矣年りもあ  
れひくまよあよハスをあれのまよハ毛のひづきをせ  
よつて下せりきるやどおもて又ハねよあひあ  
みちよひなごと使ふ、かすひとまくとあらまちえいと  
よせ乃初からふしごともあれ、二聚日繁よじよ神の意  
神山ようちなどし

やう又日繁かひよとハ參ハ根は自家のあくとゆへ  
て自家のまきをみにひきて草みて根とくとやう  
きびてちよいとよひよハそのうもとみにとえ幾年うもあ  
れみきよまあくスハあんのよハモリヒトキモテ安  
よクテトキモテアリミルヤドお義と又ハわよあひあ  
ふあよひなど傍らハあかひとみとあらよちえいと  
よせ乃細ハくふうどくともあれニテカ繁よじよ神の懸  
神山よきうたど

先君御名もせで、猶心といひ、かづらの氣をすて、八景院うと  
くとうりんまつりふ事にあとすて、友と、ひまわり乃月  
よちのうすよ神と志とし老のまやうと、さきとどうと  
じきせりむむもりくじとすままで、きよも  
よきく、悲懷懐因ふもと、草すよし、物、してゆきと  
篠すすりて、軍か、四ト、それ、かくまひうるが  
そとも黒うすく、戸とも、ひ黒とあやしくあがと、し  
き初うねは、八景院くおと、と、かくう、竹時鳥乃歌乃  
かハ、ゆき、こす、かくまひうらうらうらうらうらうら  
くと、ハ一おされ、わきやく、うるを、うかんが、え枝  
ハ子歌のや、どうと、ほう月夜、え、わらく、うきの好ひりの  
うそえ、多くと、会せり、よあたの、あうと、をと  
きあうひとのかみハ、必郭えあうと、ううゆよ、  
のひいどれかの、やまと、とよとよ

九

早苗

近里へ多くやどるかわづてとかへとくやうるも  
とあらへとハ老乃は田へとやりりとハ田とち  
人へ門田とハ家のあはれの田へらすらとハ千町田  
ひろき田へそとびとハ千町ある田へいりうどん  
五百代へもすととハ苗とくわうて田ふろとやうせ  
てうづへみせよもくとむちうらとハ田ミナツ女  
し引きとハとなくとまくとまくとまくと  
男とハ田とくわうてかくは田とくわうて  
うあくしといじよからくつとくらは泥とくわゆ  
ととハやとひとと云田子のとととハ田子のと  
くわくじとととととととととと  
うせれ紺とくわくわくりうよとくわくのと田子と  
えうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢうぢ  
くま紫民へとまくとまくとまくと  
田界へとまくとまくとまくと

九月五日

首  
篇

文獻

水鶴

うせの初日は、ひまわりがさわやかで、朝日も  
見えて、それやらなんが、と、或事中で、そんやらん  
ふとらひれりのひうちも、あくまでも、みねふ又は、そのよ  
り、させば、わからぬ、うらも、かかあよし、うらがふ又は、  
川水も、うらやうらして、うらせむ、うらがふ又は、うら  
を、まよ川アヤナ、うら、うら、うら、うら、  
合はよまう芦たまうり、うらやまとまれ、うらうらうらうら  
まゆ、うらやまと、又うらうら、うら、うら、うら、  
のうらも、うらうら、うらうら、うらうら、  
うせ乃初、されな身殺、うらうら、うらうら、うらうら、  
うらうら、うらうら、うらうら、うらうら、  
がうらうら、うらうら、  
うせのあれハ、表と、うらうら、うらうら、  
うらうら、うらうら、うらうら、うらうら、  
又えくあれのうち、うらうら、うらうら、

卷之三

乃日とて金をもてまへとトソテモトクおひはをもど  
ねむせら程よあくろんととせてひよかうトドリのす  
ともじゆハテノアキトモモテトテトテトテ鹿とあハ  
れミ又ハテノ人の麿よのとひて穀をひつゝとも  
なきちよじせよトトヨのひづとせひととほのせ  
のやまらといひせんりとひづとトマウヌハキナホ  
のちハトトキのえとあくら早よすゞく或ハトト  
もトテ種わが  
トキのうお乃無事とわづく  
よきの娘とりとひじてハモトクく、がくや、モクモクト  
慶喜とまくらがくろんのりきをもくらひ  
朝内とくもう川とくもくのよひやまよも  
とく月夜よハセモ舟のうて一人ハ持とく一人ハさ  
モとくとくハドリらそくもくもく魚のくいと  
物をあたふも入ればとのくもとくもくとて魚とく  
物ハくいよくもくもくハとくれハとくよ川よくもくの

三

ユ月朝乃よりとどひひひ宇ノリモアリ大のから  
さくぬ候といひもひれをもとまふりうれうつま  
一氣との下へやうきあらそくもそのらひよじま  
一村多乃久くまよ候のをもとんとじへりもつてやし  
あくもとくよ、かう仍音バガ奉つたと候り  
トセの朝ハ、ゆうひくううひくすうトコグレ、前  
のとハ、故のむ、とくとくとくとくとくとく  
腐シテまろ爲シテとひしてまのくらシテくらうをとめくづと  
てもよし、きや夏ひ、乃朝とく、ハ景のるこちに  
きあもあれとお好すく、ゆうびわをとよひ、とえ  
又やもやとよし、まくぬしまそく、室シテかはいととしを  
とひと空シテりて、室シテ朝とく、ひみとらよ  
とひとくすうをよそく、今をこのらうとて多く  
うちり、カホ、空乃うとくわく、ゆくとく、米乃某  
氣と給とおひ水と朝とく、てわきとおひと

蝶

とくでりてせと乃度ハアツシヤムカム又流  
やムキモトウス材無ハ夢枕乃シムナソセク  
もあう又ゼとのうハ松公於公ナムのセムセテテ  
又群玉苑歌カラミヤムシトムロウシムナシテテ、麥  
山乃志モミ植ヨウタリシタニシ氣お無シ  
トセの御吟歌川声モシラガシキヨウルカウシ  
植ヨウタリシタニシ氣

甚草  
うぢくらくもだりあかね葉セモトチバサモヒ  
やもまうくれナホシテアヒジカツづりれてわふ  
人モトシムシナカトシマシシカト後シヘイシルシ  
アシヒミ草と然びてをアキテトモシヌセ  
ナレシヤドハサヘシトシモ音ナシアヒテアノモトシ  
ナセモテセシトシモ音ナシアヒテアノモトシ  
生のちシム又ハシムセシナリ乃ちの御歌ニキ  
ハシムトシモ言氣ナシトシ

瞿麥

達  
トセ乃御吟歌川声モシラガシキヨウルカム  
アシヒミ草と然びてをアキテトモシヌセシト  
ナレシヤドハサヘシトシモ音ナシアヒテアノモトシ  
ナセモテセシトシモ音ナシアヒテアノモトシ  
ウの千種トシモアシヒミ草と然びてをアキテトモシ  
乃御歌ニシテアシグ時モシラガシキヨウルカム  
合せテ  
トセの御吟歌川声モシラガシキヨウルカム  
ヌシシムシナカトシマシシカト後シヘイシルシ  
蓮花とセモテ葉モシアヒテアシヒミ草と然  
ハ流中ナシテアシヒミ草と然びてをアキテトモシ  
トシモアシヒミ草と然びてをアキテトモシ  
御歌ニシテアシヒミ草と然びてをアキテトモシ

文部

トセウ朝からうよまくもとよみへ候ひく、次に  
夕飯  
「夕食は夕食よほそりやーと食すはゆきを、よりへえり  
れの家々夕食のえいのくじゆうよもむくわかと後  
ハ屋敷物候、夕食の事よ  
おちておそれとてもう夕食せまくとくタケナリも  
ううとそせれともせれよやのくまうむの食  
もありとて夕食のよ方ハえくれとせきわめ加多  
いあとうりとあうりばか夕食の本とて初うけ渡  
よせの朝、壁をぬれど之れはうちから食券  
いのぐるゆう  
「もくらみやくもくらみやくもくらみやくもくらみやく  
夕食は夕食よほそりやーと食すはゆきを、よりへえり  
の秋又ハとくとくおまんじとくとくおまんじとくとく  
おまんじとくとくおまんじとくとくおまんじとくとく

卷之二

よせ方初づくまへれりぬ處つ心をもへまうる  
、雪ふゆく、空すづく、うきのり空かう神ひあけまう  
さやまうる日射ひびとよ、てとぞう、一をうちかまうりのち  
其の内ひきよお殺れくめり神わ慈と神の内ハ能  
内力などハ不意發くいづももおひ中はやうなま  
をう其内のかうひあえぬむうをとく  
ち内は生えぬありてえへゆきうるれとくじう  
らとたきふも其内ハゆのよひてねえよて消る  
とあらううの參ひのそとこそ必ひのまのなま  
てハ行ともあらじくさうう拂きとといひ拂ま  
まうえあらううとひひ拂ゆう拂とひひ拂ま  
まうづかどくへりて其の内とおもふてえ  
八月既平歎其の言といひ古詩うりゆうと  
セひ幻れえととじき物とまく、下をま  
ごら乃君

家

わざとハモリをもつて流されぬかといふれ  
まし或はあまきて風の吹ひのゆよ流されまくわがわ  
舞はれよとまよふをともひかへあざとすのを

水經

家

とせ乃親てすまくいはれ、かくと、事の三、かくと  
のむろハシの木かど、おぐりて月がたりてゐるあがぐ  
らのやうなすゑとあらひを中よ蕨のやうとま  
あさりよ水をせせしものちどりと多く入て  
むろ乃アとまちまで云内銀はみどりうてとくら山  
にて林穿へもとこれとひのかぎのとひすすまむ  
まかまらせぬあられに暮もとくふはづくらとくと  
ざひうちきあもくわらひう木えちんとひよしかき  
ひとよいかいのあらふとく海のふのねく  
よせの初ハモク浦、とまよあくねながせり  
うきは跡深の歌、とまよとよまでもれけと水も

とびて、寒氣とつむぎのね無し或ひもじとがう  
ちもれて、涼を乞ひたりあか秋やうす、さよもひ  
松葉乃寒昇のあとひとハ松乃丸の吹そひ人神之  
ゆうがうりなりとも又公室り水乃木もとすすめ  
先ふ涼を心なとどり

納  
次

うせの初むどふありうとと涼を食ふとせらるり  
納涼八月より涼風さ木陰あつて涼とすれ或ハ寒り  
清水とひとふん或ハ山川の涼風波音とせえ墨氣  
とくひ威力よしつして涼氣とりめぐらとくらむなり  
うあきとハ家のもとあへ納涼とくとまゐども  
とハ芝乃上よあてどもひそへづれむ初涼八月より  
よせの初八月より秋の秋やうもく友ともまくこ  
秋とうづくもひそへづくまく  
六月移荒和移名號移名とつも月日づれも六  
月移自川より後して悪す笑顛とのそを又わよ

卷之三

やすきととくもつとひくひかね極内みぢく  
もやくと今ハ舟に臂ふうむれりて、核のうのよろ  
さ村麻のあらさひねるを繕のと用へる事と、  
麻のゆつぞ麻のをよゆとてくもく  
麻の葉ひねるをくもくへどりてくもく、  
麻とたゞ上串とくもくのとく  
彼の匂あくぬぬ、  
人ひとぐ日ちの日、  
人ひとととななぞぞうう、  
着きくく、  
よせのよせの御ご、あこらあこら、匂にお、  
漁う、  
名ないい、  
身みのの秋あき、  
身みのの川かわ

秋の月、自詠のち月をもとへて書  
うやく秋りうよかどり秋

卷之四

うかく秋りうきあとさうり秋  
集の日八百紙のち山と渓を遊んでおとぎて野宿など  
ある

箕風

廿兩

莫邪

三

卷之三

卷之三

基  
序

やあく  
復讐もとむじよハテタケル乃こそかまへ名出でる  
多殺もたゞく明るき右郎乃内とももじべー  
夏秋はうつ松の木ねえ(又)流き水の木え  
いひきをやそのあやめもさうわもともじこ  
菊といふ木の花がわら行又はあひ下まで走がり合て  
半人ほどのひきれうちもさすみゆまとお  
雲の形ハシカハナギリもひてせごのうよひぢもえ  
えぬの風どお舞

卷之三

卷之二

莫  
寫

5

卷之三

卷之三

其  
卷

10

卷之二

七八



